
ひきこもりと男子高校生

藤波綾綺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひきこもりと男子高校生

【Zコード】

Z8511W

【作者名】

藤波綾綺

【あらすじ】

もともと短編でアップしていたものを連載することにしました。

ひきこもりたいけれど、ひきこもれていらない大学生とひきこもりの

野望を阻もうとする男子高校生らのお話。

「帰れっ」

「今日の晩御飯はなんですか?」

みたいなやりとりがデフォルト。はてさて大学生はひきこもりの野望を達成することができるのでしょうか?

あるひき」もれてないひき」もつのは麗なる一冊（前書き）

短編でアップしていた「あるひき」もれてないひき」もつのは麗なる一冊」を連載用に再アップしたものです。短編と同じですが、注意ください。

とあるひきこもれてないひきこもつの華麗なる一日

わたしは、ひきこもりだ。

とはいって、あまりひきこもれていらない。

残念ながら、わたしはひきこもり学に精通しておらず、ひきこもりにどのような種類があるのかわからないが、もしかしたら、わたしはひきこもりに分類されないかもしない。

しかし、わたしは自身をひきこもりだと思っている。

なぜならば、わたしはひきこもりたいからだ。

ひきこもりである、といふと、なぜ、とよく聞かれる。
理由なぞない。

おそらく、そういう性質なのだろう。

他人が怖いとこ'のもないし、いじめられていた過去がある、とかそういうわけではないのだ。

ただ、ひきこもりたい。それだけ。

それだけであるはずなのに、どうしてこうもひきこもれないのか。わたしは世間一般的に自由な時間がいちばんあると思われている花の大学生である。大学生活を心からエンジョイしている。エンジョイの仕方はどうあれ。

わたしはひきこもりではあるが、外に出るのが怖いというわけでもなく、親に学費を支払っていたい以上、授業にはきちんと

と出席する。2年までは教養などあまり興味のない授業もカリキュラムの関係で受講せねばならなかつたが、3年の今となつては専門ばかりでいいので大変すばらしい。大学とはよことひだ。

しかしながら、授業に出るためには外にでらねばならぬ。よつて、授業のある日はひきこもれない。

ひきこもる」とはわたしにとってある種の野望であるから、授業のある日は野望を達成できなことになつてしまつ。いたつて、残念だ。

授業は勿論、毎週開講されるものばかりであるから、基本的にはひきこもれない、という結果になる。

そこで、長期休みにひきこもればいいではないか、とわたしは考えたのである。我ながらいい考え方だ。

ところが、だ。

わたしのひきこもるとこいつ崇高い野望を阻止しそうとしたくらむ奴が現れた。

「帰れっ」

「いやですよー。それより早く中に入れてください。僕、暑いのに弱いので熱中症になりますよ」

「暑いのに弱いならなおさら帰れっ、といふか来るなっ」

わたしは玄関を前に、一人の男子高校生と対峙していた。いや、男子高校生を退治していた、という方が正しいかもしない。

何をとち狂つたのか、この男子高校生、毎日夕方私の家を訪れるのだ。あのとき、余計な仏心など出すのではなかつたという後悔は今更だ。

そもそものきっかけは、わたしがひきこもり生活を本格的に始めよう準備し始めたことによる。

わたしも曲がりなりにも大学生であるから、夏休みであつても勉強はせねばならぬ。しかし、大学に行かなければならないということはなく、一人暮らしの家で十分勉強できる準備を整えた。

次にしなければならないのは、食糧の調達である。

ひきこもっている間に病気になり、病院にでも運ばれたらお話にもならない。そうならないためには、食糧は必須である。青物の野菜は熱を通して冷凍しておけばいいし、その他の食材もまた然り。一人暮らしを始めるにあたつて、5人家族用の冷蔵庫を無理して買つておいてよかつたところなどと思つ。これで十分、保存できる。保存スペースが確保できたらば、買い物をせねば、ということであれこれ買い物に出かけ、大袋をいくつもさげて帰宅する途中だつた。彼が青い顔をしているのを見かけたのは。

わたしはその日、いつになく気分が良かつた。

それはそうだ。ようやくひきこもれると思つていたのだから。だから眞向悪い人にちょびつとぐらい親切にしてやうう、という気分になつたのだ。

わたしは、男子高校生に声をかけた。

男子高校生がいたのは小さな公園のベンチで日が燐々とさしてゐる。大学の夏休みがお盆に始まることを考えれば、季節は当然、夏。しかも暑い。

少年と青年の間くらいの男子高校生は、本当に具合が悪そうだった。だから、手に持つていたゼリーを作るつもりで買っておいたらんじニュースのペットボトルを彼に渡し、少しだけ待つていてるように伝えた。とりあえず両手に持つている荷物をどうにかせねばならなかつたし、家はすぐそこだからだ。

ダッシュで家に入ると、食材をそのまま玄関において、そのまままた外に出る。買い物に行く前にクーラーを入れてきたから、食材がすぐに腐るということはあるまい。

わたしが再び、公園に戻ったとき、彼はまだそこにいて、ぼんやりとりんじニュースを飲んでいた。

「いやどうしたものか、と思って、救急車呼ぼうか、と聞いたら首を横に振るので、とりあえずうちに来い、と連れて行くことにした。彼の来ている制服から、彼が近隣の高校生であることがわかつていたので、救急車で運ばれるということは彼にとつて恥ずかしいことかもしれない、と思つたためだ。わたしはこのときの自分の判断を呪いたい。そんな親切せずに、さつと救急車に乗せてしまえばよかつたのに。

それからだ。

その男子高校生に付きまとわれるようにになったのは。

彼は近隣でも有名な進学校に通つていて、毎日課外授業があるらしい。その帰りになぜかうちに来る。そうして「ご飯を催促するのである。ちょっと図々しそうさせやしないか。

男子高校生は巽と名乗った。苗字なんか名前なんかは知らない。そこまでの興味はない。ただわかるのは、巽によつてわたしの野望は達成できない、というわけだ。巽は進学校に通つているというだけあって、驚くほど頭の回転が良かつた。

わたしがなぜ、巽に「ご飯を食べさせなければならぬのか、とひそかに憤慨し、しかしそれを直接言つたところで、なんだかんだと言いくるめられてしまふに違ひない、と搦め手で、

「親御さんが心配なさるだらう」

と、言つたときも、

「あ、親には先輩からいい家庭教師の先生を紹介してもらつて、そこで勉強しつつ、「ご飯ももらつて」と言つています。そうだ、それで用謝も親からもらつてますので明日渡しますね」

と、さらりと交わされ、

「金はもらえないよ」

と、言つたときも、なんだかんだとなぜか受け取る羽田になつていた。

わたしもそれなりに頭のいい方だと自負していたが、次元の違う人間とはどこにでもいるものだ。

そうして、今日も。

りーん、という心臓に悪い音がする。ドアチャイムの音だ。しかも奴はそれだけでなく、ドアをガンガン叩くものだからいつもして仕方がない。そんなことをしたら近隣の迷惑であるということに。いや、もちろん、彼はそれが近隣の迷惑になるということを知っている。それでもなお、そのような行為に出るのは、そうすればわたくしが彼のために玄関を開けざるを得ないということを知っているからだ。顔はきれいなのに、なんて奴だ。

そうして奴の思惑通り、わたしは玄関を今日も開けてしまつ。わたしのひきこもり生活はどうに行つた？

じあるわかいもれてないわかいもつの華麗なる一皿（後書き）

見切り発車ですが、頑張ります。そんなに遅くはならないんじゃないかと思いますのでよろしくお付き合いくださこませ。

とある男子高校生の友人観察記 その1

俺の友人である藤堂翼という奴は、天に愛された存在だと思う。眉目秀麗、文武両道という言葉がまさに相応しい。天は藤堂に二物どころか三物、いや五物くらい与えたに違いない。俺もそこそこできる方だが、藤堂とは次元が違う。要するに、上には上гаいる、つてことだ。

さて、頭もよくて、スポーツもよくできるとなれば、性格はどうか、ということになる。

この点については注意が必要だ。なまじ、藤堂は頭が良い分、他人に自分がどう見えるか、きちんと理解している。それをわかつたうえで行動しているから、彼の評判はすごぶるいい。しかし、それは藤堂の擬態に対する評価であって、藤堂自身の性格が良い、とうわけではない。

藤堂の性格についてはおいおいまた述べよう。

とにかく、穏やかで誰にでも笑顔で接する藤堂は、みんなを平等に扱う。一部の例外はいるが、鉄壁の笑顔は他人が踏み込むのを許さない。穏やかな顔の下で何を考えているのかわからない、それが藤堂翼という男なのだった。

おおつと、自己紹介が遅れて申し訳ない。

俺の名前は栃木亮太。藤堂がその他大勢の扱いをしない貴重な例外なのでそこんところ口口シク。ま、クサイ言葉でいえば親友という

やつかもしれない。そんなこんなで、「そんな大勢」よりかは、藤堂を理解していると自負する俺が、ここ最近の藤堂に起きた異変について少し述べたいと思つ。

俺や藤堂の通うK学院は、こじりでな翁の知れた進学校である。いまどき、男子校つてどーよ、と思つんだけど、OBらの強い反対があつて、共学にはまだなつていない。異性がいたら勉強に集中できないといつのが、共学反対の理由らしいけど、まったくアホらしい。

K学の周りには、女子高や共学の高校がいくつもあつて、合コンとかもショッちゅうだ。しかも、「K学院生」というのはちょっとしたブランチ扱いされているから、合コンにさえいけば、彼女なんてすぐにできる。

だから、異性云々といつのはあまり説得力のある理由とはいえない。

うちの高校で誰がいちばんモテるか、といえばそれは当然藤堂だ。しかし、藤堂は、どんなに可愛らしこ女の子に告白されてもOKしたことはない。

不思議に思つて、なぜ誰とも付き合わないのか、と聞いたことがある。

藤堂の答えは、「僕はアクセサリーじゃない」だった。言ひえて妙だ。

藤堂に群がる女の子たちは、「畠田秀麗、文武両道な藤堂巽」という存在が欲しいのであって、それは生身の「藤堂巽」ではない。もともと人嫌いな氣のある藤堂のことだから、告白されても嬉しい

ものではないらしい。

そんな藤堂が、最近妙に嬉しそうなのである。

いつも微笑んでいることが多いとはいって、感情が伴つてゐることはない。それなのに、ここに藤堂は何か楽しくて仕方がない、という風なのである。これは大変珍しいことだ。

本来ならば、今は夏休み。男子高校生としては、ナンパしたりだとか、バイトして馬鹿やつたりとかいろいろすることがあるはず。時間は一秒だつて惜しい、はずなのに。うちの高校はみつちり課外が入つている。夏休みなのに、まったくもつて夏休みではないのだ。藤堂に至つては授業自体がつまらないらしく、先週の中ごろまではちょっとぴり不機嫌だつたのだ。

それが、なぜか。

最近は課外が終わると同時にさっさと帰る。しかも課外終了が近づくとそわそわしているのがもうわかりだ。ま、そんなに気づくのは俺くらいだろうけど。

でも、気になるだらう?

気になることなどないことを口に葉に俺は藤堂の後をつけたことにした。

そうして聞こえてきたのは、怒声。

「帰れっ。わたしの邪魔をするな」

「暑いので早くなかに入れてください。熱中症になつてまた倒れま

す。ちなみに今日の晩御飯はなんですか？

声のした方へ行くと、そこにいたのは間違いなく藤堂と見慣れない女人だつた。女人人は明らかに迷惑そうにしてゐるのに、それをものともせず、強引に家の中に入つていく藤堂。面白くなりそうな予感がする。

藤堂が家中に入つたのを確認してから、俺は藤堂が入つていつた家を訪ねることにした。

「りーん」

古くはないけれど、木造アパートの呼び鈴はよく響く。呼び鈴の音にびっくりしている物音が聞こえ、すぐにどちら様ですか、とう声が聞こえた。

「えーと、そこにいるあなたがおそらく邪魔だと思つていてる友人を引き取りに来た者です」

すぐさまがちゃりとドアが開いて、

「さつさと引き取つてください」と藤堂を突き出された。

「お前、なんでこんなところにいるんだよ」

不機嫌まつしぐらです、といわんばかりの藤堂。こんな自分の感情に素直な藤堂なんて見たことがないからおかしくてたまらない。

「だつて、お前、最近おかしかつたら？だから尾行してみた」

えへ、とでもいいそうな顔で言つてやれば、本気で嫌がられた。

しかし、藤堂が再び口を開く前に、家主であろう女性が口を開いた。

「あなた方がどういう関係であろうとわたしには興味もないのに、さつさと引き取つてかえつてください」

「えー、だつて、今日夕食は先生のところで食べてきます、つて親に言つちゃつたから、僕、家に帰つても食べるものないんですけど。そしたらまた倒れますよ？それにこんなとこで話してたらおとなりさんいろいろ簡抜けになりますけどいいんですか？」

「くつ、卑怯な。夕食なら迎えに来てくれた友達とでも食べにいけばいいだろう。ついでに男子高校生が何度も熱中症で倒れるな」

「そうしたいのはやまやまなんですが。それより、玄関開けたままだとせつかくクーラーつけてるのに、意味がなくなりますよ？」

「ええい、もうわかつた。さつさと入れつ。その友人とかもだ！」

じつして、俺はひきこもりたいという野望を持つ小西奈々枝女史と知り合いになつたのだった。

とある男子高校生の友人観察記 その1（後書き）

ようやくひきこもりたい人の名前が出せました。やれやれ。

とある男子高校生の友人観察記 その2

「はじめまして、栢木亮太と申します。りょーちゃんでもりょーくんでもお好きなように。ちなみにそこにいる藤堂とはクラスメイトです」

「小西奈々枝だ。この男は藤堂が苗字か？」

「ええ、そうです」

「そうか」

俺と奈々枝女史が話していると、藤堂が小声で余計なことを、とつぶやいているのが聞こえた。これから背後には注意しよ。女に刺されたら勲章だけど、男に刺されるなんて冗談じやない。

小西奈々枝女史という人はおかしな人だった。

近所にある国立大学の3年生だと名乗った彼女は、ひきこもりになりたいらしい。いや、なりたいというのはちょっと違う。自分はひきこもりだが、なかなかひきこもることができるないので、長期休暇くらいはひきこもりたいのだが、この藤堂とやらが邪魔をするのだと彼女は語った。

「邪魔をしてるわけじゃないよ。現に奈々枝さんはこの家からではないじゃない。食材だって食べた分は僕がスーパーで買ってきてるでしょ？十分ひきこもれてるよ」

「違うつ。いや、世間には家からでなければ十分ひきこもりだと考えることもあるのかもしけんが、少なくともわたしの考えるひきこもりとは違う。よつて、野望は達成していない」

奈々枝女史のしゃべり方は独特だ。声自体がハスキーなことも相まって顔を見なれば男性のようにも聞こえる。やがて、奈々枝女

史は藤堂を説得するのを諦めたのか、冷たいアイスティーを藤堂と俺の前に置き、それを飲んだら帰れ、と言った。

「ところで、栃木くんとやらほーの男の同級生と言つたな？ クラスマイトなんだよな？」

「ええ。そうです。出席番号も前後ですよー」

「ふむ。ならば図々しいお願ひかもしれないが、この男がうちに来ないよう首根っこをつかんでおいてはくれないだろうか。この男のせいだ、わたしはひきこもり生活ができるといいのだ」

「その前に、奈々枝さんはどうしてひきこもりたいんですか？」

隣で藤堂が奈々枝さんとか呼ぶな、とかなんとかわめいているが無視。まずは、奈々枝女史がなぜ、ひきこもりたいのか聞くほうが優先度が高い。こんなに面白がりうことなんてめつたにない、と俺の本能が告げているのだ。

「理由なんぞないよ。ただ、わたしは自分がひきこもりであるとわかっているし、ひきこもっている方が性に合っているんだ。けれど、わたしは大学生であり、授業料を親に支払つてもらつてている限りは、まつとうな大学生活を送る義務があるし、それが嫌だというわけでは決してないのだ。わたしはわたしなりに大学生活というやつをエンジョイしているからな。ただ、それとは別にやはりひきこもりたいという願望がある。その願望を実現するには、長期休暇というのはもつてこいなわけだ。昨年まではいろいろあつてひきこもることができなかつたので、今年こそは、と万全の準備をして長期休暇に臨んだのだが、この男が」

と、奈々枝女史はそこで言葉を切つて、憎々しげに藤堂を見た。

「それは僕のせいじゃないでしょう。僕だって、好きで熱中症にな

つっていたわけじゃないよ。たまたま、だつて

「別に熱中症になつていたのが悪いというわけではない。人間である以上、そういうこともあるだろ。しかし、そういうことじやなくて、なぜ、まだ藤堂とやらはつちに来るのかということだ。もう用事はないはずだろ?」

「藤堂じやなくて、いつも通り、異つて呼んでよ」

なんだろう、言葉だけ見れば、すごくバカツブルっぽいのに、俺からすれば、犬嫌いなんだけど友人に頼まれてしぶしぶ犬の面倒を見ている仮飼い主と大型犬にしか見えない。

なんて面白い組み合わせだらうか、と俺は思つた。藤堂がここまで年相応に見えたのはもしかしたら知り合つて初めてかもしれない。

「確約はできませんが、善処します。でも、藤堂はすぐ優秀なのでいろいろ使い勝手はいいと思いますよ?」

案にこき使つてやればいいじゃないか、と伝えると奈々枝女史はいらん、と一言で切り捨てた。

「この男が優秀なのはまあ、そつなんだろうが、わたしには不要だ。わたしはわたしに満足しているし、助けが必要になれば、助けてくれる友人もいる。それにまだ藤堂は高校生だろ。高校生に重荷を背負わせるのは本意ではないよ」

その言葉を聞いて、おれは、ああ、だからか、と納得した。

この人のそばでなら藤堂は背伸びする必要もないし、わがままを言つてもいいのだ、と。わがままを言つて叶えてもらえるかどうかは別として、わがままを言つたからといって、見捨てられることもあきれられたり失望されたりすることもない。それは、奈々枝女史が自分に満足しているからだ。藤堂に頼る必要なんてないからだ。

面白い、本当に面白い。

藤堂が奈々枝女史に対し、どういう感情を持つているのかは定かではない。ただ姉のように慕っているだけかもしれないし、恋愛感情なのかも知れない。ただ、居心地のいい場所と認識しているのは間違いないだろう。

「奈々枝さんの夏休みはいつまでですか」

「うちには案外遅いから、10月から後期授業が始まるな。それまでは休み、といつやつだ」

「だったら、いつしませんか？俺らは一応9月の頭から新学期なんです。だから、あと2週間くらいで夏休みは終了。その間に奈々枝さんがこいつを諦めさせられたなら奈々枝さんの勝ち。9月は一切奈々枝さんの邪魔をせずに、快適なひきこもり生活をお約束します。こいつを近づけさせたりしません。だけど、8月中に藤堂を説得できなければ、ここに来ることは許してもらえないませんか？奈々枝さんにとっても悪くないでしょ？」

奈々枝女史は一度目を閉じてから、深く息を吐いた。

「それは藤堂にとって、かなり有利だし、わたしにとってあまりメリットになるとは思えないんだが、今までは藤堂は納得しないんだろう。だから期限を区切るというのをいい提案と言わざるを得ない。藤堂もそれでいいか？」

大人しく俺の提案を聞いていた藤堂も、少なくとも8月中はここに來てもいいということになつたのだから、喜んで首を縦に振った。

「ただし、だ」

と、奈々枝女史。

「わたしは案外疑り深い。そこで一筆書いてもらいたい。栃木くんは立会人ということでいいかな？」

「ええ、もううん

」
こうして、奈々枝女史と藤堂の本格的な攻防戦が始まったのだつ
た。

とある男子高校生の友人観察記 その2（後書き）

見直しをしていないので間違いがあるかもしれません。その場合は書き直すので教えてください。これでようやく本格的な攻防へと入ります。やれやれ、です。

攻防戦 その一（前書き）

今日の晩御飯はHビフライでお願いします、な藤堂とふれかわな、
な奈々枝。はてさてどうに今日は陣配があがるのやい。

小西奈々枝は読んでいた本から顔をあげ、時間を確認すると深いため息をひとつ吐いた。

先日、よくわからない勢いで知り合った男子高校生に立ち会つてもらい、藤堂とひきこもりの野望達成のための賭けをしたのだが、藤堂を言い包めるにはどうすればいいのか、さっぱり浮かんではこなかつた。

そろそろ時計の針は15時をさそうとしている。

藤堂らの課外が終わるのは14時半。そこからスーパーなどに寄つて藤堂が奈々枝のうちに到着するのが15時過ぎ。もうすぐ、あの心臓に悪い呼び鈴の音がして、奈々枝は藤堂を迎え入れねばならないのだろう。全くなんてこいつたい。

予想通り、15時過ぎ。心臓に悪い呼び鈴とともに、藤堂は顔を見せた。

「ここにちわ、奈々枝さん。今日の晩御飯はねー、エビフライがいいなと思って、材料いろいろ買ってみた」

「毎日、遠慮がなくなつてこくよくな気がするのは、わたしだけか？」

「まさか。それは奈々枝さんの氣のせいだよー。だって、毎日何作つたらいいか悩む、つて二コースで主婦が言つてたからその負担をなくしてあげようと思つて」

「いらんわ、そんな気遣い！」

しかもエビフライなんて、また面倒な、と奈々枝が思つてゐる横で藤堂は何が嬉しいのかにこにこしている。

「なんだか新婚さんみたいだよね」

奈々枝は藤堂の言葉をさっくり無視して、藤堂が買つてきた食材を冷蔵庫に詰めていく。じやがいもがそろそろ芽が出そうになつてゐるから、ポテトサラダを作つたが、それともコンソメの素でスープにするか悩むといふのだ。

奈々枝が冷蔵庫の中身とにらめっこしてゐる間に藤堂は手を洗つて、座卓の前に座つた。そして学校のカバンから教科書などを出してゐる。今から本氣で勉強するつもりはないものの、家庭教師とい名目で親に奈々枝の家によることを許可してもらつてゐるため、一応、ポーズとして勉強するフリはするつもりらしい。親に見えるわけでもないのに、妙なところで律儀な男である。

「なあ、藤堂」

やがて冷蔵庫とのにらめっこが終わつたのか、それとも単純に面倒になつたのか、いつの間にか奈々枝が藤堂の前に座つていた。座卓には一つアイスティーガラスが置いてある。藤堂は喉が渴いていたので遠慮なくそれをもらつたところである。

「んー？」のアイスティーおいしけ、ありがとう

「そうだろう、そうだろう。わたしが朝からミネラルウォーターを使つて用意していたものだからな。というか、それはまあさておき、だ

「うん」

「藤堂は親に家庭教師をしてもらつてゐる、と言つて、ここにきているのだろう？だけど、勉強なんてわたしは教えていないし、藤堂もわたしに教えてもらいたいとは思つてないだろう？つまりは『両親に嘘をついている、というわけだ。』この両親に養つてもらつてゐる

以上、わたしのところに来る時間を、塾に行くのにおけるとか、本物の家庭教師に見てもらつといふことをすべきで、つちに来るべきではないよ」

「えー、まあ、親に養つてもらつてるのは本当だけやー。だつたら奈々枝さんが僕に勉強を教えてくれるなら別に問題ないじゃん」「東大の理? 狙つてるやつに教えられるわけないだろ? だいたい、わたしは文系なのに」

「理系に行くからつて理系を習つ必要はないじゃん。むしろ、理系が得意だからこその進路だし。理系に進むから理系を習つていうのは偏見だなあ」

「うつ

奈々枝は少しひるんだ。と、いうよりも、「家庭教師」という名目で藤堂は奈々枝の家に来ることが許されているのだから、家庭教師なんてしていいじゃないじやないか、といえば藤堂は納得してひきこもりの邪魔をやめてくれるかもしぬないと安易に考えていたのだ。そもそも、そのくらいで説得されてひきこもりの邪魔をやめるような男ならば、最初からひきこもりの邪魔をしようとはしないはずである。そのことをすっかり忘れていた奈々枝である。

「うつ、と言つたまま固まつてしまつた奈々枝を見て、この人大丈夫かなあ、と藤堂は思つていて。頭はいいのにどこかといふか基本的に抜けている。お人よしというのもあるかもしれない。だから僕みたいな人間に付け込まれるんだ、といふ忠告は心の中だけにしまつておいて、それよりもさ、と弾んだ声を出した。

「それよりもさ、なんで奈々枝さんは日本文学を専攻しようと思つたの?」

「んあ? ああ、なんだつたかな。正月かなにかでもぐく暇だつたんだな。だから普段は見ないテレビをぼんやり眺めていたら

田に飛び込んできたのは、華やかな袴を着こなす一人の女性と近江神宮の一塲だった。

あのときの衝撃は今でも忘れられない。

「かのたのクイーン戦つてやつがあつてたんだ。といつか、ちょうど始まるといりでな。で、まず序歌というのが詠まれるわけなんだが、それがひじくつっこものように聞こえたんだ」

なにわびこ わくせこのはな ふゆいもつ こまをむるべと さくせいのはな

意味などはわからない。しかし、言葉の響きにひどく心惹かれた。
「まあ、普通なら競技かるたに興味を持つんだろうが、わたしの場合、かるたという競技よりも日本語に興味を持ったんで、それならそれを専攻しようと思つたというわけだ」

「ふうん、なんか奈々枝さんらしいよね

「そうか?」

「うそ

えつと、奈々枝は好きなものを追いかけるのに、理由がなくてもただ「好き」というだけで追つていけるのだ。それが少し、藤堂には羨ましく感じられる。

奈々枝は自分が日本文学を専攻するきっかけを話したのが思いのほか恥ずかしかつたらしく、夕食は、などと言いながら台所へと向かっている。先ほど、藤堂がスーパーで買ってきた材料を並べているから、この分だときっと藤堂のリクエスト通り、エビフライを作ってくれるに違いない。夕食が楽しみだ。

まずは藤堂の勝ち。

攻防戦　その2

先日は、うつかり恥ずかしくなつてしまつて藤堂のリクエスト通りエビフライなんぞを作つてしまつたが、今日こそ、と奈々枝はこぶしを握つた。

しかし、どうすればあの男にひきこもりの邪魔をされずに済むだろ？が、といふところ考へてはみるけれど、どれもピンとこない。

口で説明するつていうのもなあ。

はあ、と奈々枝は大きなため息をひとつ吐いた。

藤堂は高校生だというのに、高校生だとは思えないくらい口達者で頭の回転もすこぶる良い。下手するとこちが混乱していくつらにあつさり丸め込まれてうやむやになつてしまつることもあり、年下だからと馬鹿にしてはいけないのである。

要は、家の中に藤堂を入れなければいいのだ。玄関を開けてしまうから問題なのであつて、玄関を開けずにいればいい。
と、そこまで考えて奈々枝はいそいそとメモ用紙とセロハンテープを取り出した。

「今日もあの人家の家に行くのか？」

「当然。でもその前にスーパーに寄るけどね」

「勝てる見込みは？」

「どうかの誰かさんが大人しくしてくれるなら十分見込みあるよ。負ける気ないしね」

貴重な昼休みにそんなことを聞けば、可愛くない答えが返ってきた。

藤堂としては賭けに負けるなんてことはありえないんだろう。栃木の提案した賭けにあっさり乗ったということは、勝算があった、ということだ。藤堂が負けるかもしれない賭けに乗るなんてことがあつたらそれこそ天変地異の前触れだ。

「それに、奈々枝さんの雰囲気も最近優しくなったし」

そんなことを臆面もなく言つてのける友人に栢木はびっくりそのまま、と言いたくなる。あんなに恋愛には興味ありません、という顔をしていたのに、これは俗にいうノロケというやつなのだろうか。

「あんま、やりすぎんなよー」

「わかつてゐよ。あの人ああ見えて結構纖細だから、たぶん、やりすぎると本氣で拒絶されると思うんだよね。それだけは避けたいし」「ずいぶん、入れ込んでんだな」

「まあ、そうかもね」

「そこまで入れ込む理由は？」

「ああ、と言いたいところだけど、『まかされてはくれないんだろ？』

「そりゃー、気になるからな」

「特別な意味があるとかじゃないよ。この先どうなるかは置いとい
て。ただ、あの人、すごく自然体だから楽なんだよね」

「それはなんとなくわかる気がする。あの人、あんまり他人に興味
がなさそうだもんな。いい意味で」

「そ。自分に興味ないことは完全に意識から除外されてるから。下
手すると同じ空間にいることすら忘れられてるよ」

「それが楽だ、と」

「そういうことだね」

そういうもんなのかもしれないなー、と栃木はひとり納得する。
藤堂というのには無駄に目立つ。顔がいいとか頭がいいとかそういう
のとは別に、存在感があるというのかいるだけで華があるので。
だからどこにいても注目を浴びる。藤堂のことをよく知らない人
間でも、つい目がそっちにいつてしまふのである。それが当たり前
だから藤堂も慣れてはいるのだけども、疲れることがあるのだろう。
どちらにせよ、友人が楽しそうなのは何よりである。機嫌が良ければ宿題を写させてもらえる確率も上がる。

こりや楽しみが増えたな、というのが栃木の本音なのであった。

「よしぃ」

奈々枝は「今日はいないので大人しく帰宅するよ！」と書いたメモ用紙を玄関に貼り付け、満足そうに笑つた。

奈々枝がいなければ藤堂だつて大人しく帰るに違いない、というのが奈々枝の狙いだつた。食材を買つてくる可能性もあるのだが、それは家に持つて帰ればいいのであって、問題にはならないだろ？

ふふふふん、と思わず鼻歌を奈々枝が歌つていると、階段を上がつてくる足音がした。さすが木造アパート。音がよく響く。

奈々枝はじつと息を押し殺し、座卓の前に座つていた。日光に当たるのが嫌いな奈々枝は普段からカーテンを閉めていることが多い。一級遮光のカーテンだから外から見ても奈々枝が家のなかにいるのは見えないだろ？ 単に日光嫌いでカーテンを閉めていただけなのだが、思わぬところでいい結果をもたらすものだ。

息をひそめること数十秒。

りーん、と聞きなれた心臓に悪い音がした。

奈々枝はますます息をひそめる。息をひそめたとしても、そもそも呼吸音なんて外に聞こえるわけがないがそれは気分だ。

反応しない奈々枝に焦れたのか、もう一度、りーん、と心臓に悪い音がして、そのあと、コンコンヒドアをノックする音が聞こえた。

「あちやー。いないのかー。しょうがない、で帰るとでも思つた？ 奈々枝さん、出でこないと奈々枝さんの恥ずかしいアレコレを言い触らしちゃうよー。あることない」と言ひやうよー。例えば奈々枝さんの

奴は、やる。と奈々枝は恐怖した。

藤堂と知り合つてからそんなに日せ経たないが、彼ならばもつともらしい嘘をもつともらしく嘘つだらう。ドアを隔てた部屋のなかでこれだけはつせつ聞き取れるとこいつとせ、この近所さんにもはつおり聞こえるとこいつとだ。

「それだけはやめりー」

ドタバタと走つてドアを開けた回りには、じつに笑つた藤堂がいました。

「じつにひど、一度とやらなによね?..」

笑顔で疑問形なのに、とっても怖い。奈々枝はうなだれるしかなかつた。

またもや奈々枝の負け。

よし、今日はこのネタでこいつ、と奈々枝はほくそえんだ。

いつも通り、15時過ぎ。心臓に悪い呼び鈴がなり、藤堂が顔を出した。

そうして晩御飯やあれこれちょっとした世間話をするのもいつものこと。

それがひと段落してから、朝から仕込んでおいた水出しアイスティーを飲み、奈々枝はよし、と切り出した。

「ところだ、だ。毎日、藤堂はここにきてるだろ？」

「異でいいてば」

「呼び方はともかく、わたしはひきこもりたい。ひきこもることで健康で文化的な最低限度の生活を送りたいと考えている。ところが、だ。藤堂はそれを邪魔している状態だ。どこのことほつまり、藤堂の行動は憲法違反、といつやつだな」

うん、我ながらなかなかいいことを言つた、と奈々枝は思つたが、そもそもひきこもることが健康で文化的な最低限度の生活といえるのかどうか不明である。

「憲法は我が国の最高法規だから、国民はそれを遵守する義務がある。しかし、藤堂は今のところそれを守っていない状態だから、ここに来ることは許されないというべきだ」

「うーん、奈々枝さん。話を難しくしたいのかも知れないけれど、そもそもその健康で文化的な最低限度の生活は憲法25条でしょ？あれってプログラム規定説とかで具体的権利性を持たないんじゃない

かつたつけ？ついでにいうと、僕と奈々枝さんはどちらも私人だから、憲法の適用はないと思うよ。確か私人間効力とかいう問題だよね

「むつ」

若干、旗色が悪くなるのを感じたが奈々枝はひるみそうになつた自分を叱咤して、なお言葉を紡いだ。

「確かに、わたしと藤堂は互いに私人であるから憲法が直接適用されるわけではないが、間接的に適用されることは間違いない。とすると、私人の一般法は民法だから、民法の一般条項に基づいて憲法適合性は判断されるということだ。民法90条によると、公の秩序又は善良の風俗に反する事項を目的とする行為はしてはならん、と規定してあるから、藤堂がここに来るのもいかん、というわけだな」「奈々枝さん、条文は正しく理解しようよ。民法90条は公序良俗に反する事項を目的とする法律行為が無効なだけで、僕が奈々枝さん家に来るのは別に法律行為じゃないでしょ？だつたら無効も何もそもそも90条の適用はないよ。それに」

と、そこで藤堂は一度言葉を切つて、にこりと笑つた。

「私人間において憲法が適用されるか、について間接適用説だと今までいわれてきたけど、本当は無効力説なんじゃないか、っていう説が今は有力なんじゃなかつたつけ？」

「うつ」

今度こそ、奈々枝は何も言い返すことができなかつた。
頭のなかはパニックである。

なんで高校生が私人間効力とか間接適用説とか知ってるんだ！無効力説が台頭してきたのはここ最近のことだし、憲法学会だぞ？普

通の高校生は憲法の学説なんぞ知らないだろー。

さりに追い打ちをかけるよつこ、藤堂は続ける。

「奈々枝さんが参考にしているのって三菱樹脂事件判決だよね？結構古いよね」

なんでおのれは事件名まで知ってるんだ、と奈々枝は激しく心中だけで突っ込んだ。

私人間における憲法の適用について激しく争われたのは確かに、三菱樹脂事件と言われている事件で、下手すると藤堂が生まれる前の判決だ。

大学生らしく、難しい言葉だと理論を出して煙に巻いてやろうと思っていたのに、これでは台無しではないか。というか藤堂は本当に高校生なのだろうか？高校生で私人間効力が、なんていう人間胡散臭くてたまらない。

奈々枝の胡散臭いものを見るかのよつなまなざしに気付いたらしい藤堂は、何を疑っているのか知らないけど、と言った。

「何を疑っているのか知らないけど、僕はれっきとした高校生だよ。私人間効力とかはちょっと憲法で調べたいことがあって、それでつい最近読んだことがあつただけ。私人間効力ときたら三菱樹脂事件は絶対出でくるでしょ？」

「それはそうだが。というか、高校生が憲法を調べるとかいうのがまず信じられん！」

「そこからなの？いや、僕だって調べたくて調べたんじゃなくて、授業でそういうのがあつたんだよ？」

「憲法とかいう授業はないだろう

「ないけど。そういうのじゃなくて、奈々枝さんのときはなかった？総合学習とかいうやつ。あれだよ、あれ」

「そういうわれてみれば、なんかよくわからない調べもの学習というやつがあったかもしれん。でも憲法とかそんな難しいのではなかつたぞ？」

「うちは一応進学校ですから。そういう難しいことだつてやってますよー、ってアピールしてるわけ」

ね、と藤堂は笑うがいまいち信用ならない。それに、仮に高校でそういう授業をやつていたとしても、私人間効力なんてマニアックな問題は取り上げないのでないだろうか。

そういう問題を取り上げるには教師陣がある程度、知識があるか、下準備をしておかなければ、生徒たちが調べたことが正しいとはわからない。さすがに間違いがあるような場合は教師陣はそれを訂正する必要だつてあるだろう。

なおも不信の田で藤堂を見る奈々枝に、藤堂はそんなことより、と言つた。

「とりあえず、僕らが私人間効力とかについて学んだかどうかは置いといて、結局さ、奈々枝さんは憲法25条が云々というけれど、僕と奈々枝さんは私人同士だから憲法の適用はちょっと難しいし、ひきこもりが健康で文化的な生活だ、つていうのは難しいと思うんだよね。そうなると、別に僕のやつてることは憲法違反でもなんでもないつてことだよね？」

「ひとつと笑う藤堂。その笑顔が胡散臭いのだと奈々枝は思つけれど、藤堂の言つことはもっともある。

しぶしぶ奈々枝がそうだな、と返すと、ふふ、と藤堂は嬉しそう

に笑つた。

「嬉しそうだな」

「うん。そりゃ嬉しいよ。偏差値とか模試とか関係ない話ができるのも面白いけど、これでまた奈々枝さん家に来ることができるんだなー、って思つたら喜ぶでしょ？」

「そういうもんか？」「

「そういうもんです

「ふむ」

とにかくも、またもや藤堂の勝ち。

攻防戦 その3（後書き）

芦部信喜『憲法』第四版（高橋和之補訂版、岩波書店）と憲法判例百選（ジユリスト、有斐閣）を参照しました。
なんか最後がぶつた切った感じで終わっていますが、もしかしたら書き直すかもしません。

攻防戦　その4

前回はうつかり藤堂の知つてゐる分野での理論だつたから負けてしまつたけれど、今度こそ、と奈々枝は息巻いた。

「不法侵入だとと思うんだ
「は？」

藤堂はいつも通り、スーパーに寄つて奈々枝の家を訪れていた。前々日、居留守を使おうとしたことに対して重々釘を刺しておいだからか、スマーズに家の中にまでいれてくれるようになつたのはよかつたのだが、昨日と今日、待つていたのはなぜか自信満々の奈々枝だった。

へえ、奈々枝さんもこんな自信満々な顔するんだなー、などとそんな感想を持つ前に、奈々枝はいきなり不法侵入だ、と不穏な言葉を持ち出したのだった。

「だからだなあ、藤堂の行為は不法侵入罪の構成要件に該当する。そして違法性阻却事由もない。ついでに藤堂はすでに高校生だし、藤堂を道具として利用しようとしている間接正犯がいるわけでもないから、責任も阻却されない。構成要件的故意もばっちりあるから、刑法第130条にいう不法侵入罪の現行犯だな」

ふふん、とでも言ひそつた奈々枝に藤堂は、そうかなあとのんきな声を出した。

「まず、不法侵入罪の保護法益って平穏な生活でしょ？僕は確かに

奈々枝さんの家にお邪魔してるけど、お邪魔できるのは奈々枝さんがドアを開けてくれるからだよね。奈々枝さんがドアを開けてくれるから僕は玄関から奈々枝さんの家に入ってるわけだ。つてことは、奈々枝さんの平穏な生活を僕は侵害したりしてるわけじゃないから、不法侵入罪の構成要件には該当しないよね。つまり、不法侵入罪は成立しない、ってわけ。それに現行犯だって言つけど、こつやつて喋つてる間に時間は経つてるから、現に罪を犯しとは言えないんじゃないかなー」

それに、と藤堂は続けた。

「現行犯だとしてもすぐに警察か検察に引き渡さないと、むしろ奈々枝さんの方が不当に僕を拘束したことになるから、逮捕罪に該当するんじゃない?」「

にっこり、とほほ笑む藤堂。

「なんつ、なんでお前はそんなことを・・・」

「いやあ、単なる趣味だよ。昨日、奈々枝さんが憲法の話をしたでしょ?だから、ああ奈々枝さんは法律の勉強も大学でしてるんだろうなー、と思つてさ。そんで憲法の教科書の隣に刑法の教科書があつたし、不法侵入罪のところ付箋貼つてあつたから今日はこのネタかなあ、と」

「可愛くない?」

「可愛くなくて結構。それに、だいたい男子高校生が可愛いなんてちょっとどうかと思つよ」

「なんで説得されないんだ」

「そんなこと言われても。それは奈々枝さんの説得が悪いからですよ?僕のせいじゃないじゃん」

「ほんつと可愛くない」

「いや、だから可愛いとか言われてもうれしくないってば」

ふんっ、と拗ねる奈々枝を見て、藤堂はこの人ほんとうに大学生なんだろうか、と不思議に思つ。

言つてることはしつかりしてゐるし、落ち着きもあるのにどこか子どもっぽい。子どもっぽいといつよりも本能に素直に生きてゐる、という感じだ。

そういうや、最初、ひきこもりたい理由を聞いたときも、そんなものに理由はない、とか言つてたもんなあ。理屈をあれこれこねるのは好きみたいだけど、自分の行動にいちいち理由付けはしないし、そういうことに興味もないんだろうなあ。ますます面白いかも。こんな人もいるんだなー。

と、そんなことを藤堂が考へてゐるとも知らずに、奈々枝はあれこれ頭のなかで使えそうな知識はほかにないかを考えていた。

難しいことを言へば、煙に巻かれるに違いないと考へてゐたのに、なんて奴だ、というのが奈々枝の感想である。奈々枝も不法侵入罪がどうこうと出してみたものの、あまり理解はしていない。とりあえず、不法侵入罪と聞いたなら一般の人はびっくりして「めんなさい、となるに違ないと踏んでいたのだ。しつらうところが甘いのだ」ということに本人だけが気づいていない。

「奈々枝さんさあ、そろそろあきらめない？」

「ん? 何をだ?」

「ひきこもる」と

「なぜ?」

「いや、ひきこもる理由つてこれといってないんでしょう？だつたらひきこもらなくともよくない？」

「ひきこもる理由ならあるぞ？ひきこもりたいんだ」

「それは理由とこりうか希望でしょ」

「希望というより行動指針だな。しかも、ひきこもりなんて大学生の間しかきっとできない。いろいろな経験をするのは有用だし、今しかできないのであればそれこそやっておくべきだろ？」「ひきこもりの経験つて有用なの？つか、それ単に自堕落なだけじゃん。なんか人に会うのが怖いとかそういう理由があるならともかく。別に外に出るのが嫌なわけじゃないんだよね？」

「暑いから嫌だ」

「それ、やつぱり自堕落なだけじゃん」

「いや、そうとも言えないぞ。わたしはな、少し日光アレルギーなんだ。日焼けするとだな、全身火傷になるから時として生命の危険があるんだな」

「は？ それ、ふつうに生活できんの？」

「つむ。それほど重度のものではないから気を付けていればそういう危険な目にあつことはないが。たまに忘れるといひことになる」「だからひきこもつてんの？」

「それとこれは話が別だ。ひきこもつているのはひきこもりたいからで理由などない。だいたい、なんにでも理由があると考へること自体間違つてる」

きつぱりと言い切る奈々枝に藤堂は開いた口がふさがらない。

なんか、この人よく今まで生きてこれたな、というのが藤堂の自然な気持ちである。

やれやれ、と思いながらも、まあいいや、と考えることを放棄する。どうせ奈々枝さんが僕を納得させられるような理由を思いつけ

るとは到底想像できない。だつたら、藤堂はその間、この面白い人を存分に観察することができるというわけだ。

それで十分だな、と結論づけた藤堂は自然な笑顔を作つて、とりあえず、と言つた。

「とりあえず、今日の理論で僕を説得させられなかつたんだから、明日も来るね。スーパーで何か買つてきて欲しいものはある?」「ふむ、仕方あるまい。そうだなあ、ちーちくを買つてくれ。あれ、好きなんだ」

「ちーちくね。了解」

しかし夏の日は一寸ずつ穏やかに過ぎていく。

攻防戦 その4（後書き）

大谷實『刑法講義各論』第3版、成文堂 を参考にしました。
つか、現行犯逮捕して司法官憲に引き渡さなかつた場合、逮捕罪が
成立するかはわかりません。奈々枝が難しいことを言って煙に巻こ
うとしたので藤堂も同じように煙に巻いてみた感じです。
とりあえず、ぐだぐだな感じで攻防戦は進みます。

「あ、明日はわたし、本当に出かけるからまっすぐお帰りなさいね」

寝耳に水、だつた。

+ + +

「よう。なんかシケた面してんなー。なんかあつたか?」

「栃木。耳元で騒ぐな、うるさい」

「きやー、今日はえらく不機嫌だな。奈々枝女史と何があつた?」

「なんでそこで奈々枝さんの名前が出てくるんだ」

「だって、お前の機嫌を左右できる人間なんてそういうないだろ? だとしたら思いつくのは奈々枝女史くらいしかいないしなあ」

栃木が笑つてそう言つと、藤堂は、はあ、と重いたため息を一つ吐いた。

「なあ、ひきこもつてた人がいきなり外にでかける理由ってなんだと思つ?」

「え、奈々枝女史、どつかでかけるのか?」

「だから今日は来るな、つて言われた」

夏休みも残りわずかといつ日、いつものように夏課外に出席して、いつものように空き教室で栢木と藤堂は昼食をとっていた。藤堂は基本的にポーカーフェイスだ。顔のつくりがもともとそうなのか、それとも意識してまでのことなのはわからないが、常に微笑んでいるように見える。笑顔で人と壁を作る、それが藤堂という男である。

その藤堂が、だ。

はた日にはわかりにくいやつ、どこかへにやりとした表情をしてい るような気がして、こりやあ面白くなつてきた、とうきうきしたの は藤堂には秘密だ。どうせ、奈々枝女史関連だつて思つてはいた が、本人から肯定されると、なんだか余計に面白い。

「ひきこもり、つつつても奈々枝女史の場合、理由はないやん。ひきこもつてるのに。単にひきこもりたくて、でも普段は授業とかあつてできなかつから、夏休みを理由にひきこもつてる、つてだけだろ?だから別にひきこもりをやめるのにもそんな大した理由はないんじやねーの?」

「そりや、そなんだけど

言葉の上では納得を示しながらも、どこかすつきりとしない表情を見せる藤堂。こりや、つつきがいがある、と栢木がこいつそり考えているのは勿論、内緒だ。

「そりなんだけど？」

「ひきこもりの理由はさ、確かに本能とか言い切っちゃう人だけで、いちじど言い出したことをそう簡単に投げ出す人でもないだろ？特にひきこもりのチャンスは今年が最後だ、とか言って気合入つてたし」

「まー、俺は藤堂ほど奈々枝女史に詳しいわけじゃないから、わからんが。でも、確かに変なとこ頑固そうだよな」

「そうなんだよ。頑固なんだよ、あの人。大抵のことはどうでもいいと思つていてるから、それでもないんだけど、一度スイッチが入るとすげー頑固。しかもどこでスイッチが入るのかはわからないんだよね」

藤堂はそういうと、今まで奈々枝女史がどういうところでスイッチが入ったのかを、つらつらと述べてみせた。栃木にしてみれば、よくそこまで奈々枝女史を見ているなあと感心する。

藤堂は、奈々枝女史が他人に興味がない、というけれど栃木にしてみればどっちもどっちだ。藤堂だって他人に興味なんてないだろうし、むしろ面倒だと思っている節すらある。

しかも普段はそう口数も多い方ではないのに、奈々枝女史に関することではそりゃあ喋る、喋る。面白いことこの上ない。

奈々枝女史つてあらためて考えるとすげー。

本当にお前は高校生か、とつっこみたくなるような藤堂をどこにでもいる高校生らしくしたのは、間違いなく奈々枝女史だ。人と人のつながりつていうのはすごい、と思わざるを得ない。

「つか、気になるんなら聞けばいいじゃん。誰と会つの一、って。奈々枝女史のことだから別にふつうに教えてくれそうじゃない？」「いや、どうだろうなあ。あの人、案外そういうのこだわらないか

と思いまや、プライベートなことはあんまり話したくないらしいんだよね。プライベートとオフィシャルを区別する基準みたいなものもあるらしいんだけど、そこもよくわからん

「へえ、つづくあの人もわかんない人だなあ。ま、でもひきこもりは半分お前が邪魔してるみたいなものだし、別に外出するのが嫌なわけではないんだろうから、外に出たくなつてもおかしくはないんじゃないか？ひきこもりに飽きたのかもしれないし」

「だといいけどな」

「なにか心配」ともあるわけ？」

「いや、そういうんじゃないけど」

「けど？」

藤堂は持っていたジュースのパックをつぶしながら、実感がわからないのかも、と言つた。

「実感？」

同じように栃木も持っていたジュースのパックをつぶす。昼食後のミルクティーは最高だな、と満足しつつ。

「奈々枝さんにも奈々枝さんの知り合いがいるつてこと」

「はあ？そりやそうだろ。だつて大学生なんだし」

「いや、そうじゃなくて。その奈々枝さんが大学生だつてことは知つてるけど、なんかそれつて想像上の話でしかなくつてさ。僕らにどつての高校みたいなものだつてこと忘れてたんだよねー」

「つまり、奈々枝さんは自分ひとりだけのものとか思つてたわけ？ だつせーなあ。どんだけだよー」

けらけらと栃木が笑うと、うつせ、と藤堂がそっぽを向いた。随分ガキっぽい仕草だ。

「ま、なんにせよ、奈々枝女史に直接聞くしか方法はないんじゃねーの？」

「やでやでと提案する柄木に、藤堂は重いため息を一つ、ついてから、「ちっぽりそうだよな」とだけ言った。

男子高校生の憂鬱（後書き）

次の話でたぶん、いろいろ展開して収束に向かっていく予定です。
わざわざお付き合ってください。

藤堂はとぼとぼと一人、歩いていた。

いつもならスーパーに寄つて、奈々枝宅に向かうのだが、今日はその必要もなく、ぽつかり時間が余ってしまった。とりたてて何かやりたいこともなく、今日に限つて宿題もなく、暇である。

奈々枝さん、誰に会つんだろう。誰と会つためだつたら、ひきこもりをやめてまで外に出ようと思つんだら。

そんなことをぼんやり考へていると、いつの間にか藤堂が奈々枝と会つた公園の近くに来ていた。足が無意識に奈々枝の家に向かつっていた、というのではない。単にここは通学路なのだ。だから実は朝も奈々枝の家の近くを通つてから学校へと通つている。

公園で熱中症になつて奈々枝の家に行くよになつてからそんなに日には経つていなければずなのに、その前までどんな風に毎日を過ごしていたのか思い出せない。栃木に重症だな、と笑われるのも当然なのかもしかなかつた。

そして、公園を通り過ぎて、奈々枝の住むアパートを通り過ぎようとするとき、ふと、奈々枝の方を見てみた。

「奈々枝さん？」

+ + +

現在、藤堂はいつもの「」とく、奈々枝の家にいた。アパートをあの瞬間に通りかかった自分を褒めてやりたいくらいだ。どういうことなのか説明してもらわなければ、この怒りは発散させようがない。奈々枝の家には、奈々枝だけでなく、見知らぬ男がいた。しかも奈々枝とは随分、親しそうである。奈々枝と男がアイコンタクトを交わしているのを見て、藤堂はますます不機嫌になった。

「説明して」

藤堂の言葉に、奈々枝は誤解しているようだけど、とため息を吐きながら切り出した。

「嘘をつこうと思ったわけじゃないけど、結果的に嘘をついたのは謝る。悪かったな。しかし、本当に今日は出かける予定だったんだ。この男が来なければ、な」

そう言つて、奈々枝はきつ、と自分の隣に座つて飄々とした顔をしている男をにらんだ。

「」の男はまあ、親戚で従兄に当たるんだが。柏崎有志といつも前を聞いたことはないか？」

「柏崎、有志？」

「ああ。まあしかし男子高校生が知らなくても当然かもしねないな。この男はな、こう見えて実は結構有名なピアーストなんだよ」

「はは。お褒めいただきありがとうございます。柏崎有志です、よろしく」

柏崎は爽やかに笑うと、右手を差し出してきた。藤堂としてはよろしくしたくない相手だが、礼儀は礼儀だ。一応、軽く握手をする。

「君のことば、ナナから聞いて知ってるよ。藤堂くんだよね？ずっと会つてみたいと思つてたんだ。そしたらナナがそれはダメだつていうからさー。仕方ないからナナの家に突撃訪問してみましたー」「奈々枝さんは柏崎さんと会つから、今日は来るなつて言つたの？」

「そうだよ～？」

藤堂は奈々枝に質問したつもりだったのに、答えたのは柏崎だった。そのことにイライラする。奈々枝も藤堂の苛立ちは気が付いたのだろう。大きくため息を吐いて、今日は帰れ、と言つ。

「説明はちゃんとあるし、聞きたいことには答えるから、今日は帰れ。有志がないところで説明してやるから」

「柏崎さんがそんなに大切なの？」

「这样一个单纯に有志には用事があるんだ。そもそも用事があつたから有志と会うことになつただけだし」

「俺、今日ここ泊まつていいー？」

「お前はちょっと黙つていような。ついでにダメだ。さつき真樹に連絡したから夜迎えにくると思つた」

「げつ、なんでそんなことを」

「とりあえず、お前は黙つとけ。でないと話が進まん。ええとすまんな、藤堂。用事がなんなのかというの」

「わたくしがじやない人間

のプライベートにかかるから言えないが、それ以外については説明すると約束しよう。だから今日は帰れ」

奈々枝の説得に藤堂はしづしづ頷く。帰ることを承諾しなければ、次回から本気で家に入ってくれなくなるのではないか、という不安を感じたためでもあるし、用事がある、と奈々枝が言ったからには、本当に用事があるのだろう。それを藤堂のわがままで邪魔したりなどはしてはいけないのだ。そんな権利など藤堂は持っていないのだから。

「約束だよ。明日、説明して。僕の質問にすりゃんと答えて」「ああ、わかった。というわけで明日な」「うん」

後ろ髪引かれる思いで藤堂は奈々枝のアパートを後にした。

+ + +

「あらま、帰しちゃって本当によかったの?」

「それをお前が言つた。どうせ今日わざわざこいつ来たのもそれが目的だろ?」

恥々しそうに吐き捨てる奈々枝に対し、やつだよ、と有志はからりと笑う。

「それで用事つてなにさ」

「真樹と由梨絵さんが結婚するらしいな」

「なんで、それを」

「当然だろ？ 真樹はお前の兄でわたしの従兄だぞ？ 連絡をとつてないとも思っていたのか？ しかも由梨絵さんはわたしの部活の先輩なのに？ わたしと由梨絵さんが仲が良いということだってわかつていただろうに」

「お前は案外面倒くさがりだから連絡とつてないかと思つてた」「有志の吐き出した言葉を奈々枝は無視した。そうして、まだだめなのか、と聞く。

「まだお前は引きずつているのか」

「忘れられる事でも？」

「いい加減、諦める。お前が由梨絵さんを追い求めたとしてもあの人はお前に振り向いたりしないよ」

「そんなことわかっている！」

奈々枝の言葉に有志は語氣を荒くした。

「そんなことわかつてんだよ。だから留学だつてしまつたし、新しい彼女だつて見つけようと」

「本気でお前が新しい彼女を見つけようとしたとは思わんがな」「慰めてはくれないのか？」

有志の言葉に奈々枝は、「お前と寝たのは間違いだつたな」とだけ言った。

ひきこもつの憂鬱（後書き）

急展開です。次回から奈々枝さんサイドの話になります。

ひきこもりの思惑

「間違い、か。ならなんでナナは俺と寝たわけ？」

有志の言葉に奈々枝は重いため息を吐いた。

「聞きたくもないくせに、聞くな。そつやつて聞きたい言葉だけを引き出そうとするから引かざるんだ」

「手厳しいね」

奈々枝は有志をちらりとこちらむと、部屋の一角を占領している本棚から一冊だけ抜き出すと、読まずに机の上に置いた。

そうして思い出すのは、過去だ。まだ有志も奈々枝も高校生だった頃。奈々枝が有志と寝たのはしとしと雨の降る六月のことだった。

あの日だけでなく、それ以前から有志は精神的に参っていた。

有志は兄真樹の彼女である由梨絵にずっと片思いをしていた。由梨絵と真樹、それに有志は幼馴染のようなもので、真樹と由梨絵は高校に入ったのをきっかけに付き合い始めたらしかった。

いつから有志が由梨絵を好きだったのかはわからない。奈々枝には興味もないし、付き合いもなかつたからだ。奈々枝が由梨絵を直で知ったのは、高校に入つてのことだった。

当時から、どちらかといふとインドア派な奈々枝だったが、体を動かすこと自体は嫌いではなかつたし、中学時代からずっと陸上をやつていたので、高校でも迷わず陸上部に入った。そして陸上部のマネージャーだった由梨絵と仲良くなつたのである。

有志としては相談できるのは奈々枝しかいなかつたのだろう。真樹や由梨絵のことによく知つていて、かつ有志を甘やかしてくれる年下のいとこ。当時すでにピアニストとして注目され始めていた有志は、友人が少なかつた。音高に進めばよかつたのに、かたくなにそれは嫌だと言い張つた有志は、真樹のいる進学校、つまり奈々枝と同じ高校に入つていた。有志が高校を決めたとき、不思議に思わないわけでもなかつたけれど、思春期らしいなにか理由があるんだろうと勝手に納得していた。実際のところ、その理由は正しかつたのだけれども。

有志は、由梨絵が真樹と付き合い始めたのを知つていた。それはそうだ。三人は幼馴染な上に、真樹は有志の兄だ。わからないはずがない。それでも、近くにいたい、と有志はそう考えたらしい。

纖細なエゴイスト。

それが有志だ。奈々枝とは全く違う精神構造を持つひと。

あの日、奈々枝は有志の愚痴を聞いていた。由梨絵がどれほど素晴らしくて、どれほど有志が由梨絵を好きなのか、など。奈々枝は相槌も打たず、外を見ていた。相槌なんて有志が求めていないことなんてとっくに知つていたからだ。むしろ、奈々枝はなぜ、こうも自分が有志の愚痴を律儀に聞いてやつているのだろうか、と疑問に思っていた。ボランティア精神にあふれているとは思つてなかつたけれど、案外、自分は懐が深いのかもしない、そんなことを堂々

と考えていたのである。奈々枝も若かったのだ。

奈々枝は有志のベッドに座つて、外を見ていた。

有志の部屋の窓からは、家の裏手にある雑木林が見える。雑木林が近いせいで、夏場などは多くの虫に遭遇するが、それを除けば、雑木林が部屋の窓から見えるというのは魅力的だった。縁というものは落ち着くものだ。

と、有志は話していくうちに感極まつてきたのか、いつの間にか泣いていた。

さすがにこれには驚かざるを得ない。奈々枝にしてみれば、恋愛「」とで泣くなんてことは本や映画のなかの話で、実際に泣く人がいるなんて思つてもみなかつたのである。

とりあえず、サイドテーブルにあつたティッシュの箱を渡し、顔を洗つてくるように告げると、有志はこくん、と頷いて部屋の外へと出て行つた。なんとなくそのことに安堵する。

部屋に有志が再び戻つてきたとき、幾分かさつぱりした顔をしていたので、涙を流すというのも有効な手段なんだな、と奈々枝は思つたものだ。なのに、押し倒されるとは。

押し倒されて反撃行為に出なかつたのは、ひとえに面倒だつたし、別にいいか、と思ったからだ。奈々枝はよく人とずれていると言わ�るが、貞操観念についても彼女はちょっとずれていった。

一度寝てしまえばするづるいくものだ。

有志が高校を卒業し、本格的な活動拠点をヨーロッパに移すまでの一年、二人の関係は続いた。

「で、結局お前はどうしたいんだ?」

「どう、とは?」

「せつねと田梨絵さんをあきらめるのか、それともあきらめないのか。どうでも別にわたしは構わんが。ついに来た理由もわからずと話せ」

「久しぶりに会いたかったから、じゃダメなのかな?」

「駄目だ決まっているだろう。本心でもないくせにそりこいつひとをほいほい言つからいがんのだ」

「じゃあどうしようと?」

「逆ギレするな。鬱陶しい」

まるで虫けらを見るかのような目つきに、有志はひるむ。昔からこの年下のことに勝てたことがない。相談相手が年下なんてなんだか微妙だけれど、有志のことをよくわかつてくれ、かつ、無限ループする愚痴を相槌一つ打たず、静かに聞いてくれるのは、この年下のことしかいないのだ。

「あきらめにこなびつしたりっこ?」

「新しい恋でもすればいいんじゃないか?そもそもそれをわたしに聞くのは間違っていると思うんだが。初恋もまだなんだから」

ひめじわらつの優しさ

「は？今、なんて言った？聞きましたよ？」

さよなきよると先ほどまでとは打って変わつて、拳動不審な動きをする有志を奈々枝は、こいつ馬鹿か、と言わんばかりの目つきで見ている。しかし、そんなことによげている場合ではない。この年下のいとこは今、ものすごいことを言わなかつたか？

「初恋もまだ、とか言った？」

おそるおそる、奈々枝をうかがいながら質問する。

「言つたな。何をそんなに驚くことが？」

「いや、ナナちゃん、ナナちゃんあなたいくつよ？成人迎えたいい人が初恋もまだなんてないでしょ？年上の男のひとに恋ひつつ、とかなかつたの？」

「初恋がまだだ、というだけでなぜ有志がそんなに必死になつてゐのかわからん。年上の男なあ。興味ないな」

有志は愕然とする。

おかしな子だとはずつと思つたけれど、こじまどじまと。

奈々枝は有志の動搖に気が付かず、なおも平然と続ける。

「だいいち、有志も年上だけどへたれだし、何年も由梨絵さんに片思いしてゐくせに、あつたり真樹にもつてかれてしまふ結婚も決まつてもなおぐだぐだわたしに愚痴を言いに来るような男を間近で見ていたら恋愛にも興味が湧かないと思わないか？」

「すいませんでしたー」

有志にできることはもはや謝り倒すことのみ。とつあえず土下座しておぐ。奈々枝にしてみれば、有志の土下座など何度見たことか。

あまり価値のあるものではない。

「まあ、冗談はともかく」

「冗談やつたんか！ よかつたー、つてことはナナ、初恋くらいはあるんだよね？」

「どこからどこまでが冗談かは秘密だがな。冗談は真実を混ぜてこそ面白いといつものじゃないか？」

「いやいやいや、あのさ、ナナ、そこはさはつきさせで…」

「わたしの初恋がまだかどうかは本題じゃないし、有志に関係ないだろ？ それはどうでもいい。とにかく、だ。問題はお前がせつと由梨絵さんにフ卜れてくるべきだ、ところどだ」

「フ卜れるも何も…。だつて結婚も決まってるし、事実上、フ卜れたようなものじやん」

「せうやつて後ろ向きでつじうじしてねから、今までずっと片思いだつたんだろう？ 一回すつぱり言ひて、はつきりフ卜れてこないと、お前、終われないだろ？ どうせお前だつて、わたしにせう言ひて欲しかつたからこそ、うちに来たんじゃないのか？」

奈々枝をまつすぐ見れなくて、有志は顔をそらす。この年下のいとこは最後の最後で有志に優しい。有志が望んでいる言葉をくれる。

「あーあ、どうして由梨が好きなんだろうな。ナナを好きになればよかつた」

「それはじめんだ。お前みたいのが彼氏なんてぞつとする。そこ

までのボランティア精神はないからな」

「なんだよー、ちょっと言ひてみただけじやん。そんなにぼひくや言わなくてもやー」

「ふんつ。馬鹿の考え方休むに似たり、とこつやつだな。まあ、有志の場合、悩んでいるとすぐに音に出るから氣をつけろよ。来月からまたヨーロッパなんだろ？」

「よく知ってるね」

「真樹や由梨絵さんがお前のこと、心配してたからな」

「ナナは心配してくれなかつたの？」

「ここの甘つたれめ。心配してたわけないだろ。わたし以外にも心配してくれるやつは大勢いるのだから、わたしの心配など不要というものだ」

「話は終わりだ、といわんばかりに奈々枝は立ち上がり、キッチンへと向かう。どうやら夕食を作るらしい。

「そうそう、真樹が迎えに来て、由梨絵さんと5分間だけ一人にしてくれるそุดだから、その間にきつちりフラれてこいよ」

「えつ、5分？たつたの？みじかいよつ」

「知らん。真樹に言わせると、それが限界だそうだ。5分過ぎると真樹が部屋に乱入するつもりらしいから気をつけろよ」

「ひでー」

「そんな事態になつたのも有志がうだうだしてたせいだろ。夕食は作つてやるからそれを食べたら、さくつとフラれてくるんだな。そしてさつさと寝る。明後日はリサイタルだろ」

「ちえつ。泊めてくれてもいいのに」

「泊めるとお前は際限なくダメダメになると学んだからな。お前を甘やかすと碌なことがない」

「ひどいなあ」

「どつちが」

それきり、奈々枝は何も言わなくなつた。おそらく料理に集中しているのだろう。奈々枝は昔からそうだった、と有志は思い出す。結局、有志が奈々枝のところを訪れたのは、奈々枝が有志の欲しい言葉をくれるとわかつていたし、そろそろ由梨絵への思慕を断ち切りたいとどこかで願っていたからもある。由梨絵と二人きりに

してくれるよう真樹に頼んだのもさうと奈々枝だらう。そういうつ
オローを奈々枝は忘れないのだ。

あーあ、と思う。

ずいぶん長い間、由梨絵に片思いしていた。真樹と由梨絵が付き
合い始めてからも、ずっと諦めきれなかつた。今でも好きだ。由梨
絵が好きだと言つてくれるならなんだつてできると思つ。
だつて、好きなのだ。理由なんてない。好きだとしかいえない。
ずっと、ずっと好きだつた。

奈々枝は有志の気持ちなんてお見通しなのだろう。結局、なぜ有
志が奈々枝の家を訪れたかといつと、落ち着いて考えたかつた、と
いつのもある。

潮時、なのだ。いろいろと。

ひきこもつの優しさ（後書き）

もう一人の主人公であるはずの藤堂がまったくでこないといつましかの事態。

次回からはまた藤堂が出てきます（たぶん）。

高校生の爆発

「で、なんでお前はそんなに落ち込んでんの?」

「ほつとけ」

青少年に恼みはつきものなのです。

+ + +

藤堂は急いでいた。

それこそチャイムと同時に教室を飛び出し、誰より早く靴箱にたどり着き、あとはひたすら奈々枝の家を目指す。藤堂の走りを運動部の誰かが見ていたらば、スカウトされたかもしれない。それくらい素晴らしい走りだった。

「奈々枝さん?」

ドアの呼び鈴を連打し、ドアを「じんじん」と叩いたところで、聞こえてると言いつつ、奈々枝が顔を出した。

「わかつていいから、少し落ち着け。今日のアイスティーは珍しくフレーバーティーだぞ」

「そんなことよ!」

「そんなことではないわ。馬鹿者。話は逃げんだから、まずは落ち着け。今日のな、フレーバーティーはなかなか珍しいものでな、知人がわざわざ持つてきてくれた貴重なものだぞ?それをふるまつてやるところだから、むしろ感謝してもらつてもいいくらいだ

確かにのどは乾いていたし、冷静になる必要があると思った藤堂は、アイスティーを一口含む。さすが興味のあることにはまつしぐらな奈々枝が貴重だといつだけあって、美味しい。

藤堂がアイスティーを飲み、落ち着いたのがわかったのか、奈々枝が、まず何から話そうか、と言つた。

「本来であれば、わたしから説明するのがいちばんいいのだろうが。藤堂が何を聞きたいと思っているのかわたしにはわからないので、できれば藤堂が質問して、それにわたしが答えるという形をとるのはどうかな」

藤堂はこくりと頷く。そして、アイスティーをまた口に含んでから質問を切り出した。

「昨日来てた柏崎さんは一体なんの用事だったの？」
「また難しいことを聞くな。なんといえばいいのか。昔話にケリをつけにきた、という感じかな。あの男はな、わたしより一つ年上なんだが、これがまたうじうじした後ろ暗いところがあつて。一人じゃ決心できないっていうんでわたしが背中を押したんだよ」

「奈々枝さんが昨日、外出する予定だったのは、柏崎さんのため？」
「まあ、そうともいえるし、わたし自身のためともいえるな。わたしはすいぶん、あの男を甘やかしてきたと反省していてな、有志との関係をはつきりさせるといつ点においてはわたし自身のためでもある」

「甘やかしていた？」

「ああ。詳細を語ると他人のプライバシーにひつかかるからこれ以上のことば言えないがな」

「柏崎さんは奈々枝さんにとって特別なの？」

「従兄だからな」

「従兄以外の関係ではなかつた?」

「質問の意図がわからん。従兄は従兄でそれ以外はないだろ?」

心底不思議そうに聞く奈々枝に、何と答えればよいものか、と藤堂は頭をめぐらせる。

昨日、藤堂が見た一人はとても仲が良さそうだった。いくら年が近い従兄だからといって、あんなに仲が良いものだろうか、と思うのだ。

事実、藤堂には同じ年のことがいるものの、彼とは仲が悪いわけではないが、仲が良いというほどでもない。お互い、正月や盆に会えば話すものの、とりたてて普段から連絡を取つたり、ということではない。だから奈々枝が言つてていることが正しいのかいまいち判断がつかないので。

この時点では、藤堂は痛恨のミスをしていたのだ。本人が気づいていなかつただけで。

いつものように冷静であつたならば、彼はそれに気が付いただろう。奈々枝はめったなことでは嘘はつかない、と。

奈々枝の言葉が少ないのは、それだけしか嘘なしで言えることがないからだ。

どちらかといふと奈々枝は嘘を言つのが好きではなかつた。嘘を言うのが苦手、といふわけではない。むしろ得意である。得意であるがゆえに嘘をついていいということにはならない。人と向き合うのに誠実さは必要である、と奈々枝は考えていたし、先日、藤堂がなぜか傷ついた表情を見せていたことから、嘘を言つてはならない、と自分を戒めてすらいたのだ。普段の藤堂であれば、奈々枝が誠実に藤堂を向かい合おうとしていることくらい気づけただろう。彼は決して愚鈍ではなく、観察眼に優れているのだから。

ところが。

やはり、昨日のことが大きなショックだったのか、自分では冷静になっているつもりで、実のところ冷静ではなかつたのだ。絶賛空回り中だつたともいえる。

だからだろう。

あんな一言を言つてしまつたのは。

奈々枝は藤堂が何を聞きたいと思っているのか把握しきれずについた。奈々枝は有志をずっとそばで見てきていたので、男といつのは理解不明な生き物だ、という固定観念があつた。藤堂をやむなく家に招き入れ、会話を交わすようになると、ますます男という生き物は女とは別の世界で生きているらしい、とも。奈々枝の友人に言わせると、奈々枝の方が理解不能らしいが。

それはともかく。

奈々枝は困惑していたのである。

藤堂に質問させれば、彼の聞きたいことがわかるだろうと思つて提案したのだが、むしろ余計に何が聞きたいのかわからなくなつてしまつたような気がする。しかも団体だけは奈々枝より大きい藤堂が小動物のようにだんだん見えてきてしまつたのだ。年下、というのは案外世間的に使えるスキルなのではないか、と考えをめぐらしていったところに、藤堂が思いつめたように、付き合つてたとかはないよね、と聞いてきた。

「柏崎さんと付き合つてたことがある、とか元カレ、とかじゃないよね？」

付き合つてた、といつのと元カレ、といつのは同義語じゃないか、と言いたいのをぐぐつとこらえて、そうだなあ、と口を開く。

「付き合つてたことはないが。そういうのであれば、セフレという

のにほ少し近かつたかもしけんな

奈々枝のこの言葉が起爆剤となつた。

そして、藤堂はこんなことを言った自分をすつと後悔する」といふ。自分はもつとできる男だと信じていたのに、と。

藤堂は言い放つた。奈々枝に向かって、まっすぐ。「それは奈々枝も予期せぬひとことだった。

「あんな男やめて僕にしなよ。」

高校生の爆発（後書き）

自分で書ながら思いました。『この面どうか』と。奈々枝さんもわざわざいらっしゃるのです。

賭けの行方 その1

奈々枝はここにいらない有志を心底恨んだ。あいつは、疫病神なんか。

藤堂の精一杯の告白からしきものに対し、奈々枝はどうこうたえるべきか迷っていた。

本心を言つていいなら、ありえない、だ。

だって、なにせ高校生。一方奈々枝は一応成人した大学生だ。大学生と高校生ならアリじゃない?と思う人もいるかもしれない。だが、考えてみて欲しい。相手は高校生。そして奈々枝は大学生。高校生といえば本能まっしぐらな時期だ。奈々枝と有志が寝たのも高校時代。つまりは、そういうこと。奈々枝は面倒くさがりなので、押し倒されたらたぶん、抵抗しない。そこに情愛があるかどうかは別として。

問題は、要するに淫行条例とかにひつかかる可能性がある、ということなのだ。

この淫行条例とかいうやつはなかなかに曲者で、都道府県によつて条例のなかみは異なるものの、二十歳以下と性行すれば速攻アウト、なんてどこもあつたりする。そこに真摯な理由があろうがなからうが問答無用、なのが怖いところだ。まあ、どの条例かにもよるけれど。

そうなつたら大変面倒である。

淫行条例でしょっ引かれる可能性はそう高くはないだらうが、それでもその可能性があるのだから絶対逮捕されないとこいつことはない。そんなことになつたら田も当てられない。

つまり、[冗談じやない、といつのが奈々枝の本音なのである。

しかし、その一方で、うつかり言つてしまつた感じだけに、さきほどの言葉は藤堂の本音なのだらうと推察される。

その本音に対し、「面倒だ」と却下するのは、年上としていかがなものか、とも思つのだ。

本来、年上たる奈々枝は年下たる藤堂を教え導く存在であるはずで、彼を傷つけることは年上としてやつてはならないことだと思うのだ。

つまり、面倒だという本音は間違いなく藤堂を傷つける。それは人として最悪だらう。

うーん、と奈々枝はしばし考えた。

そうして、一息吐いてから、慎重に言葉を吐き出した。

「藤堂が何を考えているのかまではわからんが。少なくともわたし
が有志とそういう関係にあつたのは高校時代の一部で、高校を卒業
してからはそんなことないぞ?そういう関係がないのにいまだ連絡
を取つているのは、従兄だというのと、あとは有志とわたしは同じ
高校だつたせいで、共通の知人というのが存外多くてな、それでま
あ連絡を取り合うことがあるだけで」

だから、有志の代わりとか言われても困る、と奈々枝にしてははつきりしない口調で答えた。

藤堂は奈々枝の言葉にどうしたらいいのかわからず、下手すると泣きそうである。藤堂は自分の口から出た言葉に驚いてはいたものの、それが本心だと、奈々枝の特別になりたいのだと、すとん、と理解していた。

しばしの沈黙が一人の間に流れる。

藤堂は深呼吸を何度も繰り返した。

自分がらしくもなく焦っているのにはせつから気が付いている。焦つていては、奈々枝さんに対抗できないとわかつていたはずなのに、やはり自分はまだ未熟なのだ。しかし、未熟だからとその地位に甘んじていては奈々枝の特別には到底なれないだろう、ということもまた彼は自覚していた。

「じゃあ今すぐじゃなくててもいいから、これからそういう対象に見て」

まっすぐ奈々枝を見て、そう言い放つ。奈々枝には真正面から切り込んだ方が得策だと長くはない付き合いのなかすでに藤堂はわかつっていた。

これにため息を吐きそうになつたのは奈々枝だ。
どうしてそつなる、とくのが奈々枝の心境。

「えーと、藤堂は今、混乱しているんじゃないかと思うんだ。だから改めてまた考えなさい」

「それは僕の気持ちが勘違い、って奈々枝さんは思つてること？」

「そうじゃない。その可能性も否定できなくはないが、少なくとも

藤堂はわたしにわたし自身の交友関係があるとはあまり実感していなかつたんじゃないか、と思つてな。それを田の当たりにして混乱する、というのはあるだろ？とくにわたしはひきこもりなわけだし。いつも藤堂が課外が終わってここに来たら、わたしはいたわから、わたしの世界がここしかないと見えて仕方がないんじやないか、とな

「そんなこと」

「ない、と言い切れるか？」

「もちろん」

「ともかくも、わたしは今、そういう相手を募集していないし、特に必要だとも感じない。だから藤堂の気持ちが本当であつてもわたしはそれに応じることはできないよ。戯れに体を重ねることで起きても事態を悪化させるだけだと学んだんでな

「だけど、これからはわからないじゃないかつ」

「そうだな、藤堂の言うことにも一理ある。未来は誰にもわからないな」

「だったら

「それでも、だ。それに藤堂には前、わたしは9月まで夏休みでの間中引きこもっているつもりだ、と言つたな？」

「うん」

「予定が変わった。夏休みは大学の公式なスケジュールだから変わらんが、わたしのひきこもりは8月まで終わりだ。そのあと、ちよつくり留学していく」

賭けの行方 その2

「お? 留学
?」

「そうだ」

あまりにも奈々枝がせりひとこないので、聞も間違いかとも思ったがそうではないようだ。

ぶとかねうじ。

「アーリー？」

「フランスだな。とはいって、そう長いものでもないし、留学というよりも語学研修というのに近いかな」

かくしの巻

藤堂の優秀な脳みそはパニックを起こしているらしい。奈々枝の言葉をうまく理解できない。

それでもとりあえず、今までのようでは会えないのだ。といふことを理解して何とか質問を紡ぐ。

「アリバウード行くの？」

「10月から後期が始まるからちょうど一ヶ月といったところだ」

奈々枝の言葉に藤堂は少しだけほつとした。

みつやく自分の気持ちがはつきりしたのに、一年留学するとか言われたらどうすればいいのかわからないではないか。一ヶ月、といふのならまだ我慢できる、ような気がする。

「てか、奈々枝さんさ、国文学やつてるんだよね?」

「まあ、そのようなものもやつてるな」

「だつたらなんで留学？そしてフランスを選んだ理由は？」

「国文学をやつてゐからといつて留学しない理由にはならんだろう。日本を離れてみるなんてこと学生の方がしやすいし、フランスを選んだのは、たまたま、というかツテがあつたからだな」

「ツテ？」

「やう。昨日有志がここに来たのもひとつそれが理由でな。あいつ、今、フランスに留学してるんだ。それでどうせなら、つてことでな」

有志の名前が出てきたことに思わずむづとしてしまつ。自分でもガキつぽーと思つただけれど、やう思つてしまつだから仕方がない。

「つていうか、そんな簡単に留学つてできるものなの？」

「語学研修だからな。正式な留学ならもつと面倒な手続きがあるらしいが、語学学校に入るのはそつ大変なことではないよ。しかも有志がいるから彼に手続きはやらせればいいし。パスポートをとるのに少し時間がかかるくらいだな」

「へえー。つてなんか違う！」

藤堂の突つ込みに奈々枝がちょっと驚いた顔をした。じついう顔は珍しいな、と藤堂は思いつつも話を続ける。

「あつたりすぎだよ！留学つてもつといひ、さ、いろいろあるものじゃん。それに海外だよ？日本語通じないんだよ？そんななかでひきこもりたいとか言つてる奈々枝さん、生きていくんの？」

「それは行つてみないとわからないだろ？」

大して憤慨した様子も見せず答える奈々枝に藤堂は肩を落とし

た。

「そうだ、奈々枝さんはこういう人だった、と。大人げないといふか落ち着いているくせに考へが足りないというか。だから一緒にいて楽だったんだけど。

「でもさあ

なおも言葉を続けようとした藤堂を奈々枝が遮つて、もう決まりのことだから、と言ひつ。

「もうやめます、とはいえない段階でな。飛行機のチケットもとつたし、語学学校にも金を払つてしまつたんだ。それにたつた一ヶ月だぞ？言葉がしゃべれなくともボディーランゲージはできるから大丈夫だ」

だからどうしてそう自信満々なんだよ、と藤堂は内心で突つ込むものの、声に出していう元気はすでにはない。奈々枝と知り合つてから藤堂が奈々枝を振り回すこともなくはなかつたが、たいていは奈々枝に藤堂が振り回されている気がする。

「ひきこもりはもういいわけ？」

「いいも悪いもないな。予定は常に未定。ひきこもりの野望は達成できなかつたが、それはそれ。何の問題もない」

きつぱりと言い切る奈々枝を見て、ああ、この人、別にフランスでも問題なさそう、と藤堂は思つ。フランスなんてパンがおいしそうなイメージくらいしかないけど。

「と、そこではつと『づく』
フランス？」

フランスといえば、愛の国！きつと金髪碧眼があふれていて、女性を口説くのだつて慣れているに違いない。そんなところに奈々枝さんを放り込むなんて、オオカミの群れに羊を放り込むのと回じこと。危険すぎるー。

「駄目だよつ、語学研修はともかく、フランスなんてダメー。」「なんで？」

「だつて、フランスだよ？フランスといえば愛の国！日本人はちつちやいからすぐナンパされるつてこの間、テレビで言つてた！」

「どんなテレビ見てるんだ。それにフランスがダメならドイツはいいのか？」

「ドイツ、ドイツねえ。あれでしょ、ドイツといえばビール。ビールといえば酔っ払い。酔っ払いに絡まる奈々枝さん。だ、ダメー！ビ、ドイツも危険すぎるー。」

藤堂の言葉に奈々枝は思いつきりため息を吐いた。自分が高校生だったときも、こんな思考回路をしていただろうか？

「あのな、一つ訂正しておくが、ドイツでビールが好んで飲まれるのは主にミコンヘンあたりで、ドイツ全体がビールばかり飲んでいるわけじゃないぞ」

賭けの行方 その2（後書き）

奈々枝さん、つっこむとこそこなんだ？（笑）

賭けの行方 その3（前書き）

ようやく最終話です。大変お待たせしました！

賭けの行方 その3

ひきこもりと高校生の攻防は、栃木が思いもよらない形で決着を見せたらしい。

これは栃木が藤堂から聞いたことの顛末である。

+ + +

留学する気満々の奈々枝となんとかそれを思ふとどまつて欲しい藤堂。藤堂は海外がいかに危険かということを滔々と語るもの、奈々枝は鼻で一蹴。行ってみなければわからないし、そもそもそこで生活している人たちだっているのだから、気をつけてさえいれば大丈夫と主張する奈々枝。どちらに分があるか、といえば勿論奈々枝である。

「で、結局引き留められなかつたんだろ?」

栃木がにやにやと藤堂にそう問いかければ、ふてくされた顔で、そうだよ、と返された。

「だいたいさ、フランスとか遠すぎるじゃん。ひきこもりじゃないのかよ。しかもフランスでは柏崎さんの家で生活するとか言つこ

「同棲が」

「同居つー」

「いやいや、男女が一つ屋根の下に住むんだぞ？これを同棲といわ
ずしてなんという？」

「言い方がエロいんだよ。いとこ同士が同じ部屋に住むのはそり変
な話じゃないだろ？だから、同居」

「本当にそんなこと思つてんのかあ？いとこ同士でも結婚できるん
だぞ」

栃木の言葉にひるむ藤堂。それはそうだ。藤堂は有志と奈々枝が
性的関係にあつたことを知つていて。たとえそれが四年前に終わっ
た話としても、いつ再燃するかわからないではないか。

だから、せめて違う部屋に住みなよ、と言つた藤堂に奈々枝は、
もつたいたいだろ、とけろりと言つた。

+ + +

「部屋にお金を使うくらいだつたら、その分、旅行したい。それに、
藤堂が心配してゐようなどはないよ」

「なんでそんなこと言えるの。奈々枝さんはそうかもだけど、向こ
うは違うかもじゃん」

「ないな。仮に有志がそういうことじようとしても、わたしが拒絶
すればいいだけの話だし、それに、わたしがフランスに行つている
間、あいつも演奏旅行だとかなんだとかであんまりフランスにはい
ないんだ。だからちよどよかつたつていうのもある」

へたれのお守りは嫌だからな、と奈々枝は言つ。

「でも」

「でも、と言われても、もう決まつたことだし、止めるつもりはな
い。まあ諦める。お土産は何かリクエストあるか？なければ適当に
買つてくるが？」

奈々枝の質問につづむじて、藤堂は、どうしようもなくなつた
かのように、奈々枝を見上げて、迷惑？、とつぶやいた。

「奈々枝さんはさ、僕の奈々枝さんの特別になりたい、っていう要
求は迷惑？」

「はあ？」

奈々枝にしてみれば、この男はいきなり何を言い出すんやう、と
いつた心境である。高校生はやつぱりよくわからない。

「だつて、奈々枝さん、動搖もしてくれない」

「それはもともとの性格だ。そのくらいで動搖を他人に見せたりは
しないよ」

「じゃあ僕の言葉に動搖してくれた？」

「多少は、な。ただ、申し訳ないと思つたがな

「申し訳ない？」

「貴重な高校時代にわたしみたいなのにひつかかるなんて、可哀想
じゃないか。藤堂の気持ちが勘違いじゃないとしてもだな、わたし
はそれに返せる気持ちを持つてないからな」

「今すぐ同じ気持ちになれなくてもいいよ。だけど、この先、そ
ういう対象として僕を見てくれるって可能性はないの？」

「未来の可能性をいうのなら、百パーセントないと否定することは
できないんだろ？。人の気持ちはかわるものだし。だけど、だ。わ
たしはそういう対象を必要としていないし、これからいつ必要とす
るかもわからない。おそらくよっぽどのことがない限りは、そうい
う対象を必要としないだろう。なぜならもつと他にやりたいことが
あって、そういうことを考える余裕は正直ない」

ああ、と藤堂は思つた。

だからせうこいつことをちりつと詰つてしまつから、ダメなのだと。年下だから、とかそういうことを理由にしてしまえばいいのと、あくまで問題があるのは奈々枝なのだ、と。

藤堂に対しても誠実に答えようとするその姿勢がどれほどまばらしく映るのか、この人は理解していないのだ。

+ + +

「で、まあ奈々枝さんも頑固じやん？」

「まー、おそらくそうだろうな。自分の納得いかないことは首を縊に振つたりはしないだろうな」

「だから、このまま正攻法でいつてもだめだと思つて」

それに、今まで僕が持つていたスキルじゃ、奈々枝さんに通用しないつてよくわかったし、と小声でつぶやく藤堂が怖い。

「で結局どうするわけ？」

「ふふ。ね、栃木はさ、もともと僕と奈々枝さんの賭けの内容を知つてるだろ？」

「ああ。俺らの夏休み中に藤堂を説得できれば、奈々枝女史の勝ち。藤堂は奈々枝女史の家には近寄らないってやつな」

「そう、それ。結論からいけば、奈々枝さんはさ、僕を説得できなかつたわけだよ。だから僕は堂々と奈々枝さん家に通えるつてわけ

「押しかけ女房かよ」

「いやだなあ。正当な権利でしょ？ 賭けに勝ったのは僕なんだから

どうでもいいけど、美形が笑うと迫力あるなあ、ところのが栃木の感想である。いつもよりいきいきしているように見えるのは、錯覚ではないだろ？ じつのは大抵、よろしくない企みじとを考えていふときだ。

「だからね、僕は奈々枝さんをあきらめる気ないし、賭けに勝つたんだから、奈々枝さんが帰国したら今度は口説くことにするね、って言つたんだ」

「（）愁傷様」

「なんでだよー。それにさ、僕にお土産買つてこようか、って奈々枝さんが言つたんだよ？お土産買つてくれるなら、それを受け取りに行かなきゃ失礼じやないか。そのついでに口説いて何が悪い？」

「悪いとかじやなくてさー。俺、奈々枝女史がだんだん哀れになつてきた。お前みたいなのに狙われたらすっぽん並みにしつこそう」「つるさこよ。でも奈々枝さんつてそういうの淡泊っぽいから、僕くらいしつこいのでちょうどいいんだよ

「血口の中な論理展開をどうもありがとう」

どうやら賭けの行方はまだ決まつたわけではないらしい。

これからも高校生に奈々枝女史は振り回されることになるのだろう。それと同時に藤堂だつて奈々枝女史に振り回されることになるのだ。

どうやらが（）愁傷様なのかは案外わからない。

これがひきこもりと男子高校生の戦いの結末である。

ひきこもりが最終的に男子高校生に捕まえられたかどうかはまた別のお話。

いづして毎日は過ぎていくのだ。

事実は小説より奇なり

賭けの行方 その3（後書き）

お付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8511w/>

ひきこもりと男子高校生

2011年11月23日21時50分発行